

## 女子大学生における攻撃性の顕在化と感情モニタリングとの関連

東 彩佳

(安田女子大学心理学部心理学科)

## 問題と目的

感情モニタリングの1つである状況のモニタリング(感情を表現するタイミングを考えるとといった感情を表出することの適切さを評価すること)には、相手との関係を害するような破壊的な行動を抑制する働きが認められている(吉田, 2007)。しかしこれは、怒り感情制御のみであり、顕在化する攻撃行動との関係については明らかになっていない。そこで、攻撃性が高くても実際に攻撃行動として表出しない人は、感情モニタリングを上手く活用しているのではないかと推測し、本研究では攻撃性の顕在化と感情モニタリングとの関連について検討することを目的とした。このように感情モニタリングを活用している人の特徴を検討することで、攻撃行動を抑えるための1つの知見が得られると考えられる。

## 方法

**調査対象者** 広島県内の女子大学生及び大学院生 526 名。有効回答者 468 名(1 年生 186 名, 2 年生 69 名, 3 年生 97 名, 4 年生 114 名, 大学院生 2 名)。平均年齢 19.60 歳。

**調査時期** 2019 年 6 月下旬 - 7 月上旬。

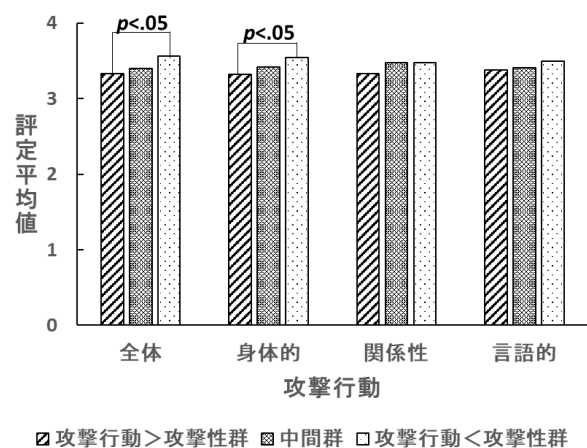
**調査手続き** 大学の講義時間内に一斉に調査実施した。調査に協力することは自由意志であること、個人情報保護に最大限の配慮をすることを伝えた。回答所要時間は約 15 分。

**質問紙** ①攻撃性：自記式能動的・反応的攻撃性尺度の中から「易怒性」「怒り持続」「報復意図」「怒り強度」「外責的認知」の 5 下位尺度、計 30 項目。②攻撃行動：日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙の中から「身体的攻撃」「言語的攻撃」の 2 下位尺度、計 12 項目、大学生用攻撃性尺度の中から「関係性攻撃」の 1 下位尺度、計 10 項目。③感情モニタリング：感情に関するモニタリング尺度の「状況のモニタリング」「他者感情のモニタリング」「自己感情モニタリング志向性」「自己感情モニタリング能力」の 4 下位尺度、全 27 項目。④社会的望ましさ：バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版の「自己欺瞞」「印象操作」の 2 下位尺度、全 24 項目。これらは全て 5 件法で回答を求めた。

## 結果と考察

以下に結果の一部を示す。

感情モニタリング(自己感情モニタリング志向性)得点における身体的攻撃行動—攻撃性のズレ[身体的攻撃行動高群(攻撃行動>攻撃性)・中間群(攻撃行動=攻撃性)・攻撃性高群(攻撃行動<攻撃性)]に関する 1 要因分散分析を行ったところ、主効果が有意であった ( $F(2, 465)=3.93, p<.05$ )。そこで多重比較を行ったところ、攻撃性高群と身体的攻撃行動高群の間に有意差が認められ、攻撃性高群のほうが身体的攻撃行動高群よりも自己感情モニタリング志向性の得点が高いことが分かった。つまり、攻撃性高群は、身体的攻撃行動高群よりも自己感情モニタリング志向性が高いことが分かった(Fig. 1)。自己感情モニタリング志向性とは、自己の感情に注意が向きやすい傾向のことであり、これらの結果から、攻撃性が高くても実際に身体的攻撃行動として表出しにくい人は、自己の感情に注意を向けようと試みることで身体的攻撃行動を抑制している可能性が示唆された。



**Fig. 1. 攻撃行動と攻撃性のズレ 3 群の感情モニタリング(自己感情モニタリング志向性)の比較**

## 引用文献

吉田琢哉 (2007).感情に関するモニタリングが、怒り感情制御方略の使用に与える影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 54, 69-79.